

満州ミツバチ 100 万群計画

—海を渡った養蜂家の足跡—

和田 依子

私は養蜂家でもミツバチ研究者でもない。8年前、「ハチ屋さん」と呼ばれる職業に興味を持ち、奈良県の藤田養蜂場を訪ねたのがミツバチとの最初の出会いだった。専業養蜂家である藤田久雄さんと息子の豊彦さんは仕事にかかわる花の話、ミツバチの話を素人にもわかるように丁寧に話してくれた。私は身を乗り出して話に聞き入り、ハチミツを採ることだけが養蜂の仕事ではないことを知った。私が子どもの頃、田舎の祖母がなぜイチゴ農家でハチミツを買っていたのかという理由も、ポリネーションの話聞いてやっと合点がいった。

養蜂の奥深さに魅了された私はそれから何度も養蜂場を訪れた。藤田久雄さんは日本の養蜂業が近年衰退しつつあることを嘆いていた。蜜源の減少や害虫問題、後継者不足。養蜂業を取り巻く環境は悪化の一途だ。だが、藤田さんが戦後、果樹栽培から養蜂家に転向した当時、養蜂は農業よりも高収入の見込める夢のある仕事だったという。そして戦前は日本だけでなく中国大陆にまで蜂群を持って行って養蜂をした人もあったと話してくれた。

「満州は養蜂の天国だったらいいですよ。馬の背中にハチ箱を乗せて、兵隊さんと一緒に大勢むこうへ渡ったんです」

広大な花の大地を兵隊とともに行進する蜂群の列。藤田さんの話が私の想像をかき立てた。私は満州に渡ったというミツバチと養蜂家についてさらに詳しく知りたくなった。そこで満州の資料や畜産科の資料から養蜂の歴史を調べ始めたが全体像がなかなか掴めないでいた。あるとき静岡の養蜂家、鈴木勲さんが当時、蜂群 100 万群計画という計画が政府主導のも

とで進められていたことを教えてくれた。

蜂群 100 万群！私は耳を疑った。現在、専業の養蜂家でさえも 200 群前後しか飼養していないのに、100 万群というのは桁がちがすぎる。

日本の養蜂業は今から 100 年近く前、明治末から昭和初期にかけてもっとも成長した。セイヨウミツバチが輸入され、ラングストロース式の近代的養蜂が全国的に普及した。昭和 10 年前後には蜂を飼う人口は 4 万人を越え、50 群以上の中規模養蜂家の数は 500 名以上、国内の蜂群数は 20 万群以上にまで達した。100 万群計画は養蜂業が急速に成長した絶頂期のできごとだったと推測される。同時に、ミツバチもまた米や農作物同様、日本の植民地政策下での移出物資のひとつだったとも考えられる。だが、それがなぜ国益にかなったものだったのだろうか。いったい「天国」と呼ばれた満州での養蜂とはどんなものだったのか、政府が掲げた「100 万群計画」とは何だったのか。話を聞こうにも満州の地を踏んだ養蜂家は皆おそらく鬼籍に入っていることだろう。彼らの話を語り継ぐ後継者さえもが高齢化しているが、少ない証言や資料をもとに、できうるかぎりその実態に迫ってみたいと思う。

高海台嶺、孤島から大陸へ

最初に中国大陆で養蜂を手がけたのは、山口県の高海台嶺だった。「最初」とする根拠は、農林省畜産局の編による『畜産発達史』の記述による。昭和 38 年 (1963) の日蜂通信では、中国大陆での養蜂について記した彼の手記が連載されている。

それによると高海は大正6年(1917)に中国の遼東半島南端の港町、大連に渡り養蜂を始めている(表1)。大正6年といえば、第一次世界大戦に参戦した日本が中国に対して二十一か条の要求をつきつけた2年後だ。日本は中国大陸での利権を拡大し、本格的な植民地政策に着手し始めていた。手記では高海は当時僧侶の身分で大陸に渡っていることがうかがえたが、彼の経歴には不明な点が多かった。ところが最近、幸運にもご息女、高海章香さんに話を聞くことができた。

「とにかく多才な父でした。特にミツバチが好きでね、二足どころか三足以上のわらじを履いて、満州中を駆けまわっていました」

高海の生涯は、まさに章香さんのこの言葉に尽きるだろう。中国大陸に進出した最初の養蜂家が専業養蜂家ではなかったことは意外だった。章香さんの話によると、高海は養蜂だけに専念していたわけではなく、画家を志したり、教師をしたり、浄土真宗の布教士として大陸で仏教を布教したりとさまざまな立場を経ているようだ。だが、いずれのときもその傍らには必ずミツバチがいた。満州養蜂の足跡をたどる前に彼の数奇な生涯に少し触れてみたい。

高海は明治16年(1883)、瀬戸内海に浮かぶ周囲12kmほどの小さな島、八島(山口県上関町)で寺の跡取り息子として生まれ、11歳の少年の頃から、島に自生するハゼを蜜源にセイヨウミツバチを飼い始めた。玉利喜造の著作『養蜂改良説』で近代養蜂を独学したという。山口市の中学を卒業すると、画家を志し東京美術学校(現東京芸術大学)に合格し上京するが、学費が続かず3年で退学。故郷八島へ帰り明治42年(1909)から高等小学校の教師を始めた。そのかたわら翌年には公益事業として八島養蜂園を設立した。オーストリア国立養蜂場からカーニオラン種を輸入し、繁殖させた。明治10年代、初めて国内でイタリアンの繁殖に成功したのが小笠原諸島だったように、瀬戸内の温暖な島は養蜂に適していた。ミツバチの繁殖に際して品種が交雑しないのが孤島の長所と言えた。

表1 「蜂群100万群計画」関連年表

和暦 (西暦)	出来事
大正6 (1917)	岐阜の松原喜八、台湾に種蜂移出。 高海台嶺、中国大陸に渡る。
大正7 (1918)	大連西公園内に大連養蜂場設立。高海台嶺、実質的運営者となる。
昭和4 (1929)	高海台嶺、安奉線鳳凰城に満州養蜂場設立。
昭和7 (1932)	満州国建国。
昭和8 (1933)	奉天職業養蜂学院開校。校長は白體泉。
昭和11 (1936)	満州への農業移民100万戸計画が出される。
昭和13 (1938)	畜産試験場の徳田義信、ミツロウ量産のための研究開始。 国家総動員法制定。
昭和16 (1941)	全国養蜂組合連合会(全蜂連)発足。 渡辺寛、満州へ養蜂視察。 満州養蜂振興委員会設立、「蜂群100万群計画」を計画。 太平洋戦争。
昭和18 (1943)	岐阜の松原喜八、静岡の松田正義ら、蜜蝋増産報国隊を結成。 岐阜の松田、福岡の小島ら蜂群を満州に移出。
昭和19 (1944)	科学動員協議会でミツロウ増産に関する審議会が開かれる。
昭和20 (1945)	終戦。

高海はカーニオランの繁殖に力をそそぎ全国的に販売する一方、山口県下に養蜂普及を啓蒙する活動を始めた。大正3年(1914)には山口県知事に養蜂奨励の必要性を説いたり、農事試験場の嘱託指導員として各地で養蜂講習会を開き、養蜂の指導に当たった。こうした養蜂普及に向けた活動が軌道に乗り始めたちょうどその頃、彼の耳に大陸での養蜂事情が入ってきた。

聞くとところによるとロシア領シベリアからウスリー地方では養蜂が盛んで一か所に千群、2千群を置いて採蜜が行われているという。そして、ロシアに隣接する満州は満州花畑といわれるほど蜜源植物が豊富であるにもかかわらずミツバチの姿が見られないということだった。

「之を聞いては放任できず天然の資源を有し乍ら徒らに捨てつつある事は遺憾であると痛感し、自ら開拓の人に当たるべく渡満を決意した」

高海は渡満の決意をこう手記に記している。

当時、日本は欧米諸国に倣い中国大陸での植民地政策を着々と進めていた。豊かな資源と広大な土地を求め、多くの日本人が青雲の志を抱き満州をめざした。広大な満州は、狭い土地に暮らす日本人にとって憧れの別天地だ。狭い日本の中のさらに小さな孤島で志高く蜜蜂を飼っていた高海の眼前にも、夢のような花畑の幻影が現れたにちがいがなかった。

大正6年(1917)9月、高海は寺を弟に任せ、カーニオラン種4群を携え、大連に渡った。大連は南満州鉄道の南の終着駅、日本人にとっては大陸の玄関口とも言うべき都市だ。欧風の建築物の中にアカシアの美しい並木道が続く街。明治37年(1904)以降日本軍によって関東州統治の拠点とされた街だ。西本願寺布教士の資格を持っていた高海は、まず本願寺大連別院に身を寄せ満州の足がかりとした。

最初の養蜂場、大連養蜂園

大連での養蜂の初仕事は、関東庁農事試験場から要請された4群のカーニオランの飼育指導だった。この群れは大正4年(1915)、浄土真宗西本願寺の第22代門主大谷光瑞が寄贈した。光瑞といえば有名な西域探検家だ。その前年、第3次大谷探検隊がロンドンからシベリア経由で西域に入っているから、カーニオランは探検隊が直接現地からもたらした群という可能性もある。その真偽はさておきこの4群に端を発し、高海は大連駐在のロシア領事やハルビンのロシア軍人などに養蜂を指導し始めた。

高海の大きな転機となったのは、満州日々新聞社主催の養蜂講習会だった。高海はここで講師を務め、5日間にわたってミツバチの飼い方を指導した。会は市内の有力者を中心に260名が集まる予想外の盛況となった。そもそも講習会は高海と同じ山口県出身で大連の道路修繕工事事務所所長をしていた山近保太郎という養蜂愛好家の後ろ盾で実現した。山近ら会の主催者たちは講習会の成功を受け、種蜂の提供やミツバチの管理法を指導する機関の設立に動いた。市議員や貿易商、満日新聞社社員などから出資を募り、大正7年(1918)、大連養蜂園



図1 大正7年(1918)晩秋の大連養蜂園

が設立された(図1)。場所は大連西公園の中。公園に隣接する18万坪の土地と5軒の建物も無償で提供された。養蜂技術を持つ高海はこの養蜂園の実質的運営者となった。

高海は大連養蜂園を拠点に、養蜂普及活動に精を出した。養蜂を志す日本人のみならず中国人にも蜂群を提供し、開園1年目には500群以上を配布した。さらに高海は、南満州鉄道(満鉄)に対し、鉄道沿線における現業員の家庭副業として奨励するよう、提案した。今風に言えば「駅前養蜂」といったところだろうか。駅周辺には開拓団の集落があるし、駅前だと移動養蜂をするにも利便性が高い。鉄道を枢軸に侵略と開拓をすすめていた当時の政策に、養蜂の振興を組み込んだともいえる。高海は、満鉄が費用を負担する条件で、毎年、鉄道の通る5か所の土地で養蜂講習会を開き、養蜂普及を説いて回った。しかも高海はただミツバチを頒布し、養蜂技術を教えたにとどまらなかった。普及した蜂群の後追い調査をし、蜂群の増え方、採蜜量などを調べた。満鉄の援助でイタリア、アメリカ、ハワイからセイヨウミツバチを輸入し、それらの成育状況のデータを取り、カーニオランが満州での飼育に適していることを確認した。

また、調査は蜜源植物にも及んだ。高海は普及した先の採蜜状況を分析し、大連よりも北の安奉線沿線で多く蜜がとれることを踏まえ、大正10年(1921)と11年(1922)、それぞれひと月を費やして満州北部(北満)の原野を訪れ、蜜源植物をつぶさに見て歩いた。

「北満の原野を巡回して小花を付ける野草が

順次開花して無限に展開して蜜源植物無尽蔵であることが判った。全く天然の養蜂上の好適地で世界第一であると言っても過言ではない」

自らの足で歩き、雑草の中に身を埋め小さな花の前に目を近づけている様子が想像できる。高海は地平線まで広がる花畑の中に立ち、養蜂への夢をいっそう膨らませたにちがいがなかった。

鳳凰城の満州養蜂場

北満巡回で高海は満州養蜂への確信を得、養蜂の北進をめざす拠点として満州唯一の模範養蜂場を建設しようと考えた。高海は安奉線の中の鳳凰城（鳳城市）という土地を養蜂場の候補に選んだ。そして満鉄副総裁松岡洋右に計り、鳳凰城で十町歩の土地を無償で借り受けた。もともと中国人から無理矢理取り上げた土地だから無償でも損はない。そこは匪賊が跋扈する辺境の地で日本人の住んでいない場所だったから、人が移住するというだけでも満鉄には好都合だったのだろう。

このとき高海は満鉄に対し、毎年5か所以上の地方で養蜂講習会を満鉄主催でおこなうこと、巡回指導のための鉄道乗車料と養蜂用品の輸送料を全線無料にするという便宜を要求し、これらすべてを受け入れさせた。高海は鳳凰城の広大な土地だけでなく満州を縦横無尽に自由に行き来する権利を得たことになる。

昭和4年（1929）、高海は安奉線鳳凰城駅に隣接する土地に満州養蜂の一大拠点、満州養蜂場を建設した。中国人が常時4、5人雇われて高海の仕事を手伝った。高海は養蜂場にじっと留まって仕事をするタイプではなかった。ここを拠点に各地で養蜂を奨励する講演会活動を行い、同時に布教士として毎月一回、軍隊に親鸞の教えを布教して回った。

昭和7年（1932）、日本の傀儡国家、満州国が建てられると、開拓団の北満への入植が盛んになった。第一弥栄開拓団が北満に入植すると高海は開拓指導員にミツバチを託した。すると1年のうちに4群が16群に増え、ハチミツが6斗採れた。高海はこの実績から満州の蜜源の豊かさを確信し、ただ養蜂を普及させるだけで

はなく、「満州を世界第一の天恵の養蜂地化する」ことを目標に掲げた。そのためには北満、北安省、瀋江省、三江省、河北省、殊に松花江沿岸に大々的に普及を計るべきだという内容のパンフレットを作成し、宣伝に務めた。

満州養蜂場は満州養蜂の中心的機関となり、満鉄農務課、関東軍、大使館から養蜂についての一切を委託された。満州拓殖会社（満拓）からは高海が書いた『満州養蜂の秘訣』という養蜂指導書も発刊された。

種蜂ブームの到来

ここで日本国内の状況に目を向けてみよう。そもそも日本の近代養蜂は、最初、農作物の収穫をあげるポリネーションとしての有効性が認められ、農家の副業として導入するよう奨励された。今ならミツバチを飼うと言えば安直にハチミツ生産のためと考えてしまいがちだが、それは農業になじみのない都会の消費者の視点にすぎない。戦前、日本人の約半数が農業に従事していた。ハチミツという嗜好品より生業としての農業の生産性をあげることが国民の関心事だった。

岐阜の養蜂家、松原喜八は高海台嶺が渡満したのと同じ大正6年（1917）、台湾に渡航し種蜂10万群を移出した。まだ種蜂がブームになる前のことだった。松原は台湾総督府の依頼で、台湾全土で養蜂についての講演と実地指導に当たり、大正9年（1920）には朝鮮でも同様に養



図2 松原喜八総本店のカタログ（昭和13年頃）

蜂講師を務めた。当時、松原は岐阜の市議員と地元企業の役員を多く兼務する実業家ながらも、明治43年(1910)からセイヨウミツバチを飼い始め、種蜂の頒布と養蜂用具一式の製造販売をする松原喜八総本店を興していた。

松原は養蜂業の啓蒙にも熱心だった。昭和6年には養蜂についての詳しい手引き書『蜜蜂と蜂蜜』を発行し、2年のうちに8回も増刷されるほどの人気となった。この頃、すでに国内では約4万戸の農家が副業としてミツバチを飼うようになっていた。近代養蜂導入の初期には、高海や松原のように、養蜂の利点を熱心に啓蒙する養蜂家の役割がことのほか大きかった。

昭和3年(1928)から5年(1930)頃には種蜂輸出ブームが起こった。横浜、神戸、大阪、門司など主要な港から、中国、朝鮮、台湾の港に向けてミツバチ(種蜂)入りの巣箱を満載した船が出航した。やがて1箱12~13円だった蜂が、3年のうちに26円以上にまで高騰した。最盛期には巣板5枚分のミツバチが50円もした。当時、10円あれば一軒家がひと月借りられたし、米なら2俵買えた。勤め人の初任給が中学卒で35円、大学卒では50円という世の中だ。それを考えると種蜂がどれほど価値あるものだったかが想像できるだろう。

その後、松原喜八総本店が発行したカタログでは、養蜂業は次のように絶賛されている。

「播かず、耕さず、與へず然も自活する。資本は僅少である而も其の利益頗る多く、資金の還元が頗る急速である」(図2)。

「ハチが儲かる」という今では考えられない常識が戦前の日本に存在していた。

昭和4年(1929)から6年(1931)の3年間で松原は天津、北京、大連、済南などへ100万群というすさまじい数の種蜂を輸出した。昭和7年(1932)、満州国が建設され満州方面への種蜂の輸出が増えるようになる。松原の会社でも昭和5年(1930)頃から満州移民が飼育するための種蜂と養蜂器具を満州拓殖公社に納入し始めた。そして9年(1934)には拓務省に武装移民向けの養蜂用具を納入するように



図3 海外に輸出された蜂群(松原喜八総本店)

なった。高海の養蜂啓蒙活動と並行し、国内からは蜂群や用具が満州に大量に輸出されるようになった(図3)。

地図で見る「駅前養蜂」の成果

昭和12年(1937)に発行の雑誌『農業の満州』で、鉄道総局の筒井五郎は満州の養蜂の概況を発表している。それによると北満ではハルビンと綏芬河を結ぶ濱綏線沿線を中心におもにロシア人が、満州南部(南満)では安奉線沿線を中心に日本人が養蜂を行っていた。北満のロシア人はコーカシアンまたはロシア種と呼ばれるミツバチを飼い、デーダント式巣箱に12~3枚の巣枠を使っていた。南満の日本人はイタリアン種系のミツバチを飼い、ラングストロース式で8枚枠入りが多く、10枚入りのいわゆる標準巣箱はほとんど使われていなかった。現地でもともと養蜂をしていた満人は、東洋種で少々小型の在来種ミツバチを飼っていたようだ。彼らは冬になると越冬のため地面を掘って巣箱を埋めていたという。

筒井の報告書によると、鉄道総局が鉄道自警村をはじめ鉄道従事員と沿線の鉄道愛護村に養蜂を副業として奨励していたようだ。その地域は地図に示した(図4)。また満州全体では以下の地域で養蜂がさかんだった。

北満では新京とハルビンを結ぶ京濱線、濱州沿線、濱北、拉濱、京圖沿線、松花江岸撫遠、樺川および虎林縣地方ハルビン付近、松花江上流、間島、ウスリー接壤地、奉吉沿線。南満では、遼陽以南の各地方、安奉線沿線が主な地域

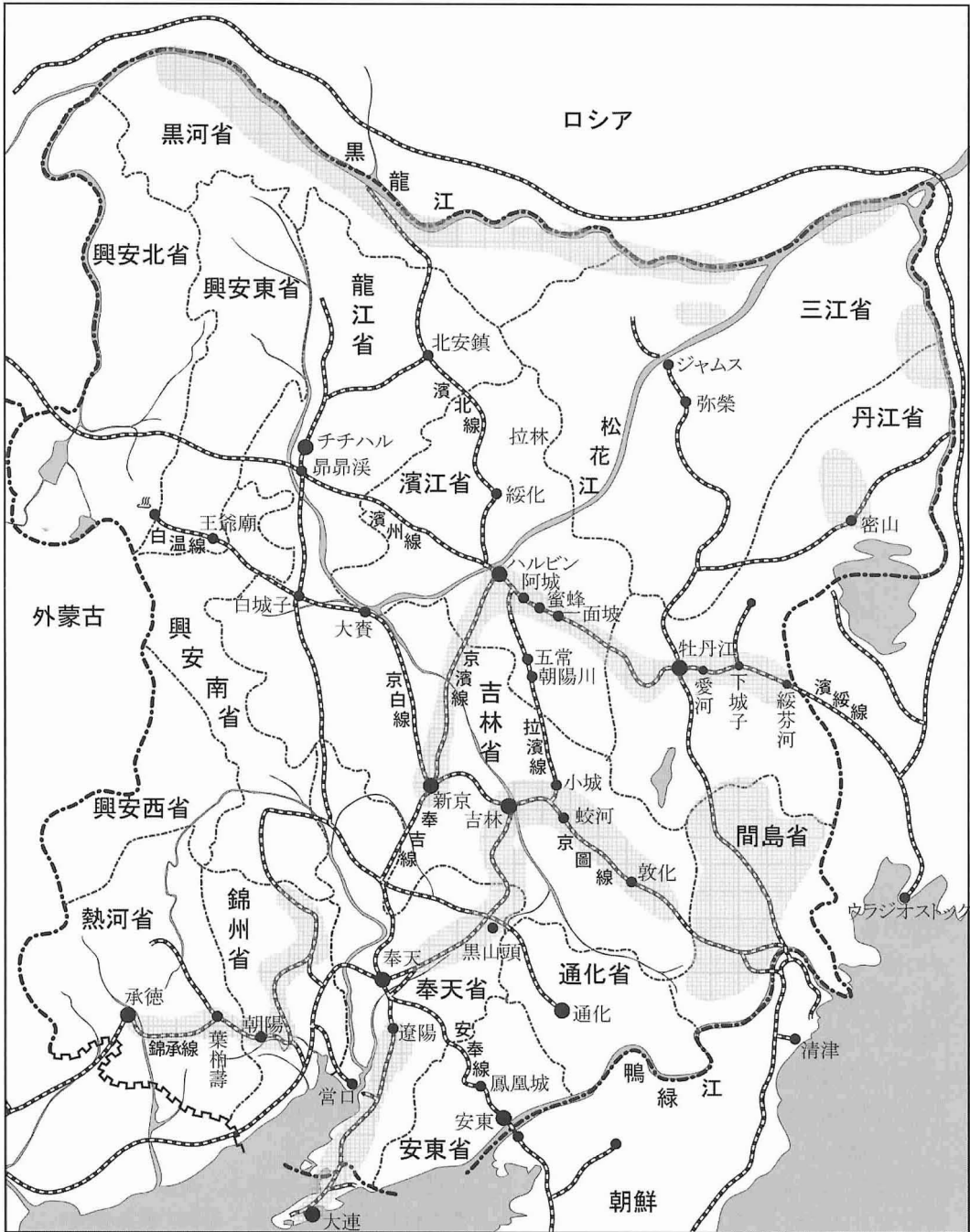


図4 満州鉄道路線図と養蜂を導入した鉄道沿線の村，地域（網掛け部）

- ・濱北線 北安，綏化各警務段
- ・濱綏線 山市自警団，一面坡警務団
- ・拉濱線 五常警務段，小城城自警村
- ・京圖線 蛟河自警村，敦化および朝陽川警務段
- ・奉吉線 口前・黒山頭各自警村，煙筒山・山城鎮各警務段
- ・錦承線 金嶺寺，朝陽，葉柏壽警務段
- ・京白線 大賚警務段
- ・濱州線 昂昂溪警務段
- ・白温線 王爺廟警務段

でおもに日本人が養蜂を行っていた。鉄道沿いの開拓団の農業の副業として養蜂を普及させるという高海の提案が現実に行われ、10年のうちに「駅前養蜂」は着実に進んでいた。

満州土産、ハチミツ羊羹

ハチミツの採蜜量を見てみると、北満ではシナノキ蜜が1群あたり40 kgから60 kg、南満ではおもにアカシア蜜で1群あたり20 kgから40 kg採蜜できている。高海の満州養蜂場では春にアカシアで1群あたり20 kg、秋にハギ、ソバで20 kg採蜜できている。ハチミツの種類は日本のように豊富ではないが、シナ蜜は品質が良く高値で取り引きされ、ソバ蜜は満州人に珍重されていたようだ。中国では昔から補血や咳止めの薬として利用されていて需要が多い。北満では土地柄ロシア菓子用に需要があった。

それまで北満地域で生産されるハチミツはハルビンに集積され、シベリア経由でヨーロッパ、ロシア輸出されていたが、日本が占領するようになってからはそれが途絶え、国内消費にあてられるのみとなった。一方、南方へは南満地方で生産されたハチミツとともに大連、營口経由で北京、上海へ、安東（丹東）地方経由で朝鮮半島に送られていた。だが、価格は満州国建国をはさんで5年ほどのうちに50分の1に暴落した。満州がどれほど養蜂に適しているも、採れたハチミツの多くは行き場を失っていた。

昭和16年(1941)、岐阜の養蜂家渡辺寛は養蜂視察のため満州を訪れている。その視察記「満州養蜂視察記」の中で、当時濱綏線沿線でもっとも養蜂が盛んな一面坡駅の様子を書いている。

「早速下車、北側のプラットフォームから数歩の所、構内売店に『一面坡名物蜂蜜』として葡萄酒と共に看板が有って、停車の数分間に、乗客が我も我もと売店に殺到。列を作って蜂蜜を買おうとしたら、肝心の蜜はモウ売切れ、蜂蜜葡萄酒を渡すがままに買って来ます。それが二合入りの一壺一圓五十銭、山葡萄の汁液に蜂

蜜を加えたシロモノとの評でありました。」

安奉線では沿線の養蜂家たちが養蜂組合を組織し、ハチミツをビール瓶1本1円、サイダー瓶1本50銭で販売していた。また「蜂蜜羊羹」というしろものが旅行客相手に売られていたようだ。渡辺も視察旅行の途中、吉林にある蜂蜜羊羹の製造元、二葉製菓所を訪ねている。あいにく羊羹は製造休止状態で手に入らなかったらしく、視察記から味や形をうかがい知ることにはできない。いったいどういう羊羹なのか。調べてみると、国内では明治45年(1912)頃、愛知の関養蜂園の加工部が製造した蜂蜜羊羹がその元祖らしい。当時は養蜂のさかんな岐阜でも作られていたようだ。おそらく砂糖の代わりにハチミツを使用した羊羹だろうが、中国にあってもケーキやクッキーではなく羊羹というのがいかにも日本的だ。満州は日本人にとって手の届く場所にある初めての西洋的な場所であるはずだ。にもかかわらず、葡萄酒もハチミツも珍しい満州土産にすぎず、肝心のハチミツの食文化は日本人にとってまだ成熟途中にあった。

養蜂の中心地、蜜蜂駅

昭和16年(1941)、満州へ養蜂視察に訪れた渡辺寛は、岐阜で近代養蜂を始めた草分け的存在だ。もともと銀行家だった渡辺は明治40年(1907)頃から岐阜県羽島郡でイタリアン種のミツバチを飼い始め、養蜂家に転身した。種蜂ブームで中国への輸出で成功し、大正期には台湾、朝鮮へ養蜂視察に出向いた。雑誌『養蜂之友』を発行し、養蜂技術書『近代養蜂』を発刊するなど啓蒙活動にも力を入れていた。

視察は、大阪にある日満企業株式会社からの依頼でなされ、その詳細は雑誌『東亜の養蜂』で「満州養蜂視察記」として7回にわたり連載された。視察記というより旅行記に近く、沿線の観光地と各地の有力養蜂家を訪問した素直な感想が書かれている。渡辺は弟と通訳を連れ、朝鮮半島経由で満州に入り、北満の濱綏線沿線、そこから南下し奉吉線沿線を視察し、ロシア人や中国人養蜂家と会っている。

そして最後に大連を訪れ、ミツバチを導入しているリング農園の経営者など数名の日本人養蜂家と会い旅を終えている。全行程1か月という長い視察の中で特筆すべきことは、濱綏線沿線に蜜蜂駅という名の駅があること、そして奉天に奉天職業養蜂学院という養蜂の専門学校があることだ。

蜜蜂駅（ミーホウチャン）は濱綏線で一面坡からハルビンに向かって3つ目の駅で、ハルビンと阿城の間あたりに位置する（図4）。駅構内にはハチミツ専門の売店があり、ハチの絵を掲げた小屋がある。車窓からは養蜂場風景が見える。渡辺は濱綏線が満州養蜂の中核地区だとはっきり書いている。濱綏線沿線はロシア国境に近く、昔からロシア人による養蜂がさかんだった。そこへ日本人開拓団による養蜂が加わりますます発展した。高海の手記によると、昭和10年（1935）にここで満拓公社による蜜蜂越冬講習会が開かれたこともある。駅名に蜜蜂とつけるほど盛んな場所だったのだろう。

一方、奉天職業養蜂学院は奉天（瀋陽）市内大北門外にある。大同2（昭和8、1933）年開校以来2百数十名の卒業者を出し、いずれも自営や興農合作社で養蜂に従事したという。学院の卒業写真を見てみると、校舎の高楼には「教育報国」と書いた額が掲げられ、その下に日本と満州両方の国旗が掲げられている。ちなみに学院の校長、白醴泉は安東省鳳城出身の中国人だ。鳳城といえば高海台嶺の満州養蜂場のある場所であることから、学院の高海との関わりも推察できる。

最前線で使われたミツロウ

渡辺が満州を視察した昭和16年（1941）末、日本は太平洋戦争に突入した。この年、国内の養蜂業界では、養蜂団体のあり方を巡って対立していた專業養蜂家と副業養蜂家がようやく折り合いをつけ、年明け早々に「全国養蜂組合連合会」（全蜂連）を発足させた。連合会の中心的存在だった静岡の養蜂家松田正義は、当時満州国興農部で畜産科長をしていた柳田桃太郎の支援で満州養蜂振興委員会を設立した。この委

員会のもとで、満州を大規模なミツロウ（蜂ろう）生産場にする計画が生まれた。

松田正義は静岡県清水市で生まれ浜松高等専門学校を出たあと東京都庁に就職した。建築設計の仕事をしていていたが結核を患って故郷に戻り、昭和6年（1931）からミツバチを飼い始め、年々群数を増やし11年（1936）には北海道まで大規模な移動転飼養蜂を始めていた。そして養蜂家組合の中心的立場になった後、内閣技術院の嘱託となった。内閣技術院とは内閣直属の科学技術行政機関である。当時、日本は国防力強化を目指しとりわけ科学技術振興に重点を置いた。昭和13年（1938）、国家総動員法制定とともに内閣に科学審議会を設け、17年（1942）には技術院を設置した。技術院は科学動員体制の要ともいえる機関で、ここを中心に天然資源などの科学研究を手当たり次第に軍需的に応用しようとした。松田正義が技術院の嘱託になったのも、松田がミツロウ生産を拡大するためにはなくてはならない存在だったからだ。

柳田桃太郎は戦後参議院議員や北九州市市長を務めることになる人物だが、当時は新京（長春）で満州中央官庁の興農部の役人として働いていた。興農部は満州の農、畜産、水産、林業すべてを統括する部署であるが、太平洋戦争が始まるともっぱら関東軍からの供出要求に応える部署となっていた。柳田は軍が必要としていたミツロウ生産を松田にもちかけたのだ。

ミツロウは爆弾、砲弾、魚雷に使用されるだけでなくプロペラ、スクリュー、光学兵器の滑沢剤、または錆止めとして軍事的に広範囲で使われていた。ミツロウはヤシの木から採れるカルナバロウに比べてしっかりして扱いやすいので、兵器に利用すると確実に効果があがった。当時、ミツロウを塗布した砲弾は飛距離が伸びるといわれていた。ミツロウは戦争の最前線で勝敗を左右する軍需物資だったといっても過言ではない。太平洋戦争開戦で軍は急遽大量のミツロウを必要とし、その供給先に満州を選んだ。満州が養蜂に適した場所であることは

満鉄調査部の資料や渡辺の視察からも明らかだった。計画の基礎となるミツロウ研究はすでに昭和13年(1938)以降、畜産試験場の徳田義信が北海道の松田の蜂場で量産するための試験を終えていた。

満州養蜂振興委員会では、向こう5か年のうちに満州の蜂群を100万群に増やすという「蜂群100万群計画」をうち立てた。5年で100万群をつくるには、1年目に7万群を用意すれば、単純計算で5年で100群を越えることになる。100万群という数の根拠は、昭和11年(1936)、満州への「農業移民100万戸計画」が出されたことに呼応したものだろう。これは満州国樹立から4年を経ても大陸への移民が進まなかったため満拓が立てた、20年間で100万戸、500万人の移民を送り出すという計画だ。その実態は農業振興のためというよりも満州国内の治安維持とソ連に対する戦力を補給するのが目的だった。戦争が始まると人も物資も非常時体制だ。ミツロウを捻出するためとにかく100万群にまで増やせばかなりのミツロウが採れるだろうという井勘定だったのかも知れない。

計画では蜂群だけでなく、同時にミツバチを扱うことのできる養蜂家も指導員として募集があった。募集に応じた養蜂家は軍属として優遇され、ミツバチとともに船に乗り込み満州へ渡った。

一方、満州では100万群計画を受け、政府指定の種蜂納入会社が作られた。一般公募の結果、多くの希望者があったがその中からハルビンの満州蜜蜂工業株式会社、新京の満州養蜂株式会社、安東の満州精密工業株式会社を選ばれた。これら3つのうち、満州精密工業株式会社については詳細がわからなかったが、満州養蜂株式会社は昭和15年(1940)、松原喜八と満拓との合併でにわかになされた便宜的な会社だとわかった。満州蜜蜂工業については高海と関係があった。昭和17年(1942)、満州蜜蜂工業は養蜂指導者として高海台嶺を迎え入れている。高海は会社の取締役兼養蜂場長の待遇を受け、鳳凰城の養蜂場に居なが

らハルビンから派遣された社員を指導した。したがって蜂群は鳳凰城の高海の養蜂場から直接政府に納入することになった。

計画では、当時、松花江岸で開拓団らが飼養していた5万8千群の蜂群があった。それらをもとに、各社2500群ずつ、あわせて7500群の種蜂を政府に納入する責任を負った。毎年7500群ずつつぎこみながら増殖させるのだから2年で2万群を超え、4年で10万群を超える計算になる。

また、国内から満州へも続々と蜂群がもたらされた。岐阜では昭和18年(1943)、松原喜八、松田正義が中心となって蜜蝋増産報国隊が組織された。松田は岐阜の養蜂家らと一緒に株式会社東亜養蜂を設立し、手持ちの蜂群から合わせて3000群を出し、敦賀から朝鮮半島の清津に出荷した。松田は柳田から提供された資金で、全国の養蜂家から蜂群をかき集めた。同じ年、福岡の小島も門司港から蜂群1000群と養蜂道具一式を清津へ送った。当時国内の蜂群数は30万群。松田らはその中から最終的に10万群程度の蜂群を順次満州に送りこんだ。

昭和19年(1944)、東京の科学動員協議会でミツロウ増産に関する審議会が開かれた。そこで国内養蜂はミツロウ生産を第一義とする戦時養蜂に改めるべきだとの方針が決まった。

当時海軍ではミツロウ100tを緊急に必要としていた。そこで半分はアフリカなど海外から輸入し、残り半分は国内で集荷したいとの意向があった。昭和20年(1945)3月、農商務省でミツロウ会議が開かれた。数か月後には終戦を迎えるとは予想できなかったのか、海軍はいよいよミツロウが必要となっていることを告げた。

徳田は養蜂家にミツロウの増産と供出を呼びかけるため全国を講演して回った。戦争に国民が総動員されていく中、ミツバチも全国から動員され、満州へ集結した。

戦争で知ったハチミツの味

昭和20年(1945)8月、ついに敗戦を迎え、日本人養蜂家は皆裸一貫で中国大陸から帰って

きた。何十万群ものミツバチが広大な原野に置き去りになり、100万群計画は水の泡と化した。

多くの養蜂家が憧れた花の別天地、満州での100万群の大養蜂計画は一夜の夢のごとく消滅したが、短い夢の間にも得難い多くの体験をしたことだろう。戦後、開拓団として満州へわたり現地で養蜂技術を身につけた者の中から、新たな養蜂家が生まれた。そして多くの日本人が大陸のハチミツ文化を身近に体験した。

藤田養蜂場の藤田さんがこんな話をした。

「向こうから引き上げてきた兵隊さんから聞いたことがあります。戦争で大陸に行つてはじめてハチミツの味を本当に知ったっていう話を。大陸に侵略に入つてハチミツの味がわかったというのは皮肉なことです」

敗戦まぎわの中国大陸で、飢えた日本兵が食糧を求め民家に略奪に入った。するどい家の台所にもハチミツの入った大きな瓶が置いてあった。最初は水かと思ひ口に含んだが、意外にも甘いハチミツで、その美味しさに夢中になって飲んだという。当時、日本ではハチミツを料理に使うという発想すらなかったが、中国や朝鮮半島ではハチミツを非常食として瓶に入れ常備する習慣があった。戦時下の蜂群100万群計画は成就されなかったが、ただハチミツの味だけが、食糧欲しさに農家に忍び込んだ一兵士の記憶の中に、刻み込まれた。

現在、中国は世界第一のハチミツ生産国となり、日本は今や欧米に並ぶハチミツ消費国に成長しつつある。伝統あるヨーロッパの養蜂文化とは違った形で、東アジアに新たな養蜂文化圏が形成されることを望まずにはいられない。

(〒547-0047 大阪市平野区平野元町8-15-601)

謝辞

本稿を作成するにあたり、以下の方々に多大なご協力をいただいた。快くお話しいただき、また資料等をご提供いただいた。この場をお借りして厚く御礼申し上げます(以下五十音順・敬称略)。

クインビーガーデン 鈴木勲

浄安寺 高海章香

日本養蜂はちみつ協会

藤田養蜂場 藤田久雄

松原喜八総本場 松原通夫

参考文献

岐阜県養蜂組合連合会. 2001. 岐阜県養蜂史. 岐阜県養蜂組合連合会, 岐阜. 334 pp.

松原喜八. 1931. 蜜蜂と蜂蜜. 大日本養蜂場, 岐阜. 290 pp.

松原喜八. 1957-1958. 日本養蜂新聞 99, 101, 102号. 農林省畜産局. 1966. 畜産発達史 本篇. 中央公論事業出版, 東京. 1843 pp.

力富阡蔵. 1961. ある養蜂家の生涯. 黎明書房, 名古屋. 115 pp.

高海台嶺. 1963. 日蜂通信 第72~77号.

筒井五郎. 1937. 農業の満州 9(2).

渡辺寛. 1941. 東亜の養蜂.

渡辺寛・渡辺孝. 1974. 近代養蜂. 日本養蜂振興会, 岐阜. 726 pp.

YORIKO WADA. Story of the Million-Colony Project in Manchukuo. *Honeybee Science* (2004) 25(1): 1-10. 8-15-601, Hiranomotomachi, Hirano, Osaka, 547-0047 Japan.

This is the historical reportage of a beekeeping project which was carried out in Manchukuo while Japan aimed to expand its territory to the Asian Continent in 1930's. The goal of the project was to scale up beekeeping there to be with one million colonies of honeybees.

After the founding of Manchukuo as a puppet state of Japanese government in 1932, beekeeping was expected as a promising industry in the state. Beekeeping was promoted among Japanese immigrants living along the Manchurian Railways, which was the main life line of the state.

Because it was wartime, especially beeswax was highly demanded as one of the most important munitions, the production of beeswax was urged by the policy of the army-oriented Japanese government. Whole beekeeping industry in Japan was driven to contribute it and huge number of colonies of *Apis mellifera* was shipped from Japan to Manchukuo until the end of the war.

At the end of the war, the number of colonies was estimated to reach nearly a half million, but Japanese beekeepers drew back from the state with nothing but their own, all bee colonies were abandoned in the wilds. The beekeeping project with an unprecedented scale had disappeared as a bubble.